

## 第3編 総長式辞

### 凡 例

1. 本編には、西島安則総長、井村裕夫総長、長尾真総長、尾池和夫総長、松本紘総長、山極壽一総長、湊長博総長の入学式・卒業式・修了式・学位授与式における式辞を収録した。ただし、湊総長の式辞は、2021年度入学式までを収録した。
2. 本編の構成は次の通りである。(1)第1章西島安則総長、(2)第2章井村裕夫総長、(3)第3章長尾真総長、(4)第4章尾池和夫総長、(5)第5章松本紘総長、(6)第6章山極壽一総長、(7)第7章湊長博総長。
3. (1)(2)については、『京大広報』から収録した。(3)(4)(5)(6)(7)については、京都大学ホームページから収録した。
4. 各式辞の表題及び本文の表記は典拠資料に従った。編集した際に付した注記は〔注〕で示した。
5. 2000年5月23日博士学位授与式が執り行われ、長尾総長が式辞を述べているが、3.に表示した典拠では確認できなかったため収録しなかった。

大学院秋季入学式〔2020年度〕

2020（令和2）年10月3日

本日、京都大学に入学した修士課程63名、博士（後期）課程105名、専門職学位課程6名の皆さん、入学おめでとうございます。教職員とともに、皆さんの入学を心からお慶び申し上げます。また、これまで皆さんを支えてこられたご家族や関係者の皆様に心よりお祝い申し上げます。

さて、今日皆さんはさらに学問を究めるために、それぞれの学問分野へ新しい一步を踏み出しました。京都大学には多様な学問分野の学部や大学院が設置されており、10の学部、18の研究科、13の附置研究所、17の教育研究施設が皆さんの学びを支えます。修士課程では講義を受け、実習やフィールドワークを通して学部で培った基礎知識・専門知識の上にさらに高度な知識や技術を習得し、研究者としての能力を磨くことが求められます。博士後期課程では論文を書くことが中心となり、そのためのデータの収集や分析、先行研究との比較検討などが不可欠となります。さらに、現代社会の課題に答えるべく、実践的な知識や技術の習得を目指した5つの博士課程教育リーディングプログラム、2つの卓越大学院プログラムが走っています。

今年度の大学院秋季入学式は、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックの影響、特に国外からの新入生の入国がままならないという状況の中で、オンラインでの配信も余儀なくされました。そのような状況におられる入学者の皆さんには直接にお会いしてお祝いの言葉を述べられないので非常に残念ですが、今日はweb動画を介して、お祝いのメッセージを送りたいと思います。

今日から皆さんは、様々な学問領域で京都大学の大学院修士課程、博士（後期）課程および専門職学位課程における新しい研究生活への第一歩を踏み出されます。始めにまず、大学の歴史について簡単に紹介しておきたいと思います。京都大学は1897年に、日本で2番目の帝国大学として創立されました。19世紀以前のヨーロッパにおける大学は専ら聖職者・法律家・医師など専門職を養成する機関であり、明治維新後の日本で創設された帝国大学の目的も、近代化政策の中で、各分野での実務的専門家の教育養成にありました。

しかし、19世紀後半から始まる「第二次産業革命」の結果、社会における科学や技術の役割が急速に拡大してまいりました。それに伴い、民間のアカデミーに委ねられていた研究を大学の機能に組み入れるべきであるという機運が高まってきました。とくに新興のドイツでは、ベルリン大学を中心に研究と教育を一体として考え、研究を通して教育するというスタイル、いわゆるフンボルト主義が生まれました。それは国家からの「学問の自由」を掲げ、研究者と学生が自主的な研究に基づき真理と知識の獲得を目指す大学理念です。

このような大学の構造転換の中で、2番目の帝国大学として創立された京都大学は、このドイツ型の研究大学モデルをいち早く選択していくことになりました。ちょうど同じ頃にアメリカでは、研究を中心とする大学として、ジョンズホプキンス大学やシカゴ大学が設立されたところであります。それ以来今日まで、京都大学では「自由の学風」の下で「研究を通して教育する」ことがモットーとされてきました。本学は我が国最初の研究型大学として出発したということができると思います。

さて、元来研究とは、個人の好奇心や未知への探究心を動機としたものです。しかし、科学やその応用としての技術が人間生活に及ぼす影響が大きくなるに従って、また科学と技術が一体化した科学技術と認識されることによって、その社会における役割は急速に大きくかつ多様になってきました。

皆さんは最近よく「基礎科学」と「応用科学」という言葉を聞かれると思います。昨今では、公的な研究支援も、「基礎科学」と「応用科学」にどのようなバランスで行われるべきか、といったコンテキストで議論されることが多いと思います。そもそもこの区分けは、1945年当時、アメリカの科学政策を指導していた大統領科学顧問ヴァネヴァー・ブッシュ Vannevar Buch が、ルーズベルト大統領に宛てた「科学—この終わりなきフロンティア」(Science-The Endless Frontier) というレポートで初めて示したものです。この中で彼は科学を、研究(リサーチ)に専念する基礎的な科学と製品開発(ディベロップメント)への応用のための科学に区別し、大学は基礎研究に専念するためのものであり公的資金が投入されるべきであるが、応用研究に携わる企業には公的資金は投入すべきでないと明確に述べています。

昨今の我が国での産学連携の議論から見ると少し意外に思われるかも知れませんが、この考え方は実際に冷戦下のアメリカの科学技術政策にも強く反映されております。これが、戦後アメリカが質量ともに世界の科学と技術の発展を牽引してきた基礎にあると思われまます。もちろんこのような基礎と応用という単純な2分割は、今日ではあまり現実的ではありません。純粋な探究心に基づく基礎研究の成果が、ほとんど間をおかずに画期的な応用研究へと展開する場合も決して珍しくありません。私自身も免疫研究のフロンティアでそのような経験をしてきました。これから皆さんには、このような基礎科学と応用科学、あるいは自然科学と人文社会科学という狭い領域にとらわれず、自由で複眼的視野をもって研究を進めていかれることを期待しています。

科学あるいは科学者と社会とのつながりについて、もう少しだけ考えてみたいと思います。現代社会は、文字通り地球規模での困難で緊急度の高い数々の問題に直面しています。

地球の気候変動や環境破壊、大規模な自然災害や原子炉の処理、世界的な感染症の拡大などは、人類の社会経済活動の急速なグローバル化により顕在化してきたものと考えられます。

今まさに世界を席卷している新型コロナウイルスのパンデミックも、その一つでしょう。昨年末に中国の一都市に発生した新型コロナウイルスはまたたく間に世界中に拡大し、すでに全世界で3000万人以上が感染し、死者も100万人を超えるに至っています。発生当初から世界中の研究者が、診断法、治療法、ワクチン開発、臨床研究をはじめ様々な専門性に基づいて研究を展開し、この感染症についての多くの科学的事実が比較的短時間に急速に蓄積されてきています。これらの研究成果が、このパンデミックの克服に大きな貢献をもたらすことは間違いないでしょう。

しかし、これらの科学的成果が直ちに、パンデミックに対する対応策の決定に速やかな統一的指針を与えうるかという点、そう楽観できるわけではありません。この感染症は世界中の人々をほぼ同等に襲ってはいますが、その対応は、地域の歴史、文化、宗教、経済体制や生活様式などにより非常に異なっています。科学データに基づいた防疫対策モデルであっても、それが有効性を発揮できるかどうかは社会システムや人々の意識にも規定されています。その点においては、社会科学や人文科学の学知が活用されなければなりません。

こうした状況は科学の成果が今後さらに大きく進展してもおそらく変わらないものだと思います。1990年代に、オックスフォード大学の科学哲学者ジェローム・ラベッツ Jerome Ravetz は、「科学によって問うことはできるが、まだ科学によって答えることのできない領域」が存在することを指摘し、これをポスト・ノーマルサイエンスと表現しています。ここでノーマルサイエンスとは、今私達が考える通常の科学を指しており、原因-結果が明確なこの領域では、科学や技術は人間生活や社会活動における意志決定に直接的な役割を果たしています。他方、ポスト・ノーマルサイエンス領域とは、事象が極めて複雑で不確実性が高く、かつ意志決定に非常に多くの利害(Stakes)が関与する領域です。この不確実性は、ビッグデータと超高速演算を基礎にするAIによって必ずしも解決されるものではないとラベッツは述べております。だからこそ、彼はポスト・ノーマル・サイエンスを「安全と健康と環境と倫理の科学」The sciences of safety, health and environment, plus ethics と呼んでいるわけです。

今回のパンデミックはまさにこのポスト・ノーマルサイエンスの領域にあり、極めて複雑で重要な社会的課題に対する対応や意志決定に、人文科学や社会科学までふくめて科学が全体としてどこまで関与できるか、またどのような形で関与すべきかについて考える、重要な機会になると考えます。

少し固苦しい話しになりましたが、最初に言いましたように、研究とは、あくまで個人の好奇心や未知への探究心を動機としたものであり、従って元来それは楽しいものです。私自身、40年以上研究の世界で過ごし、心ゆくまで研究を楽しんできました。他方で皆さんは、科学はどこまで、そしてどのような形で重要な社会的意志決定に関与しうるかを考えねばならないという新しい時代に向けて、これから研究生生活を始められることとなります。このようなことを頭の隅におきながら、皆さんがこれからこの京都大学で、思う存分研究生生活の日々を楽しんでいただくことを心から祈念して、私からの挨拶にかえたいと思います。

本日は、まことにおめでとうございます。

## 大学院学位授与式〔2020年度〕

2021（令和3）年3月24日

京都大学から修士の学位を授与される2,184名のみなさん、修士（専門職）の学位を授与される159名のみなさん、法務博士（専門職）の学位を授与される128名のみなさん、博士の学位を授与される585名のみなさん、誠におめでとうございます。

学位を授与されるみなさんの中には、487名の留学生が含まれています。累計すると、京都大学が授与した修士号は85,849名、修士号（専門職）は2,175名、法務博士号（専門職）は2,519名、博士号は46,427名となります。御来賓の山極前総長、御列席の理事、関係部局長、プログラムコーディネーターをはじめとする京都大学の教職員一同、みなさんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

とくにみなさんは、昨年からコロナ禍の下、研究室での学術研究活動が大きな制約を受ける中での学位論文の執筆を余儀なくされ、大変ご苦労されてきたことと思います。このような困難な状況の中にもかかわらず、各自の学位研究を貫徹され今日の日を迎えられたことに対し、大いに敬意を表すると共に心からお祝いを申しあげます。みなさんは、正式に京都大学の学位保持者ということになります。これからみなさんは、引き続きアカデミアの世界で、あるいは新しく実社会において、文字通り中核的人材としての道を歩まれるわけであり、その意味では、今回の学位の授与は、到達点ではなくむしろ新しい出発点であるということができるでしょう。

ご承知のように、博士学位は PhD と呼ばれます。PhD はラテン語の Philosophiae Doctor（ピロソピアエ・ドクトル）の略で、元来は伝統4学部のうち神学・法学・医学の実学を除いた哲学部の学位を指しておりましたが、やがて領域を問わず真理発見に資する学術であれば全ての分野の博士学位を示すようになりました。アメリカで最初に PhD を出したのは19世紀半ばのイエール大学ですが、当時は非常に希少で称号的性格の強いものであり、全米でも年間たかだか20名程度だったようです。「学位を与える教育課程としての大学院」という新しい教育課程が創設されたのは、19世紀後半のジョンズ・ホプキンス大学でした。この辺の事情については日本大学の羽田積男（はだせきお）先生が、アメリカの医学教育に革命をもたらしたエイブラハム・フレックスナーの『大学論』などをもとに詳しく紹介しておられます。当時の大学は主に教養教育、リベラルアーツが中心でしたが、新しい大学院課程は大学卒業者を対象として、より高度で専門的な学術研究を可能にする教育課程を基礎として、学位を与えることを目的として作られたものであります。その特徴は、フェロー制と言われる奨学金制度を導入したことであり、当時の大学院授業料は年間80ドルであったと言われておりますけれども、フェロー学生への奨学金は年間500ドルだったと言われ、世界各国から優秀な学生が大学院入学を希望して集まってきたそうです。その結果、ジョン

ズ・ホプキンス大学から毎年まとまった数の学位取得者が輩出されるようになり、その多くが大学はもちろん政府機関あるいは民間で要職についていったと記録されています。この当時は修士と博士の学位は並列的で、現在のような前期・後期という関係ではなく、各大学の慣行によって使い分けられていたようです。ジョンズ・ホプキンス大学の成功を受けて、この大学院制度は19世紀末までには、ハーバード大学、コロンビア大学、シカゴ大学、カリフォルニア大学など、アメリカ全土に広がり、やがて全米で毎年何万人もの学位取得者がうまれていくことになります。20世紀以降、アメリカが世界の学術と研究の主導的役割を果たしてきた背景には、大学院制度の確立とそこに世界各地から集まった優秀な大学院生が最先端の科学研究に従事してきたという事実があったといっても過言ではないでしょう。

我が国では、学位は1887年（明治20年）に発令された学位令によって、授与されるものでした。みなさんは野口英世という医学者の名前はよく知っておられると思います。彼は1876年（明治9年）の生まれで、大学院はもちろん正式に大学を卒業したという学歴もないのですが、1911年（明治44年）35歳の時に京都帝国大学から医学博士を授与されています。同年の官報には、「文部大臣は京都帝国大学病理学教室の推薦を受けて福島県平民野口英世に医学博士の学位を授ける」という趣旨が、その詳細な論文概要とともに記載されています。1920年（大正9年）の学位令改正以前の学位授与者は文部大臣であったことがわかります。この1911年は、ニューヨークのロックフェラー研究所にいた野口が「病原性梅毒スピロヘータの純粋培養に初めて成功した」と発表し、世界的な脚光を集めた年でした。その後彼は、黄熱病など当時の世界の重要な感染症の病原体について多くの華々しい研究成果を発し、3回もノーベル生理学・医学賞の候補に挙げられています。しかし、後年その研究発表のかなりに誤りがあることがわかり、ノーベル賞を受賞することはなく、野口はアフリカのガーナで研究中に黄熱病に倒れ、51歳の生涯を終えました。先に述べたスピロヘータ純粋培養の研究も、現在ではかなり否定的に考えられています。しかし、京都帝大へ提出された初期の研究論文は蛇毒（じゃどく）の免疫学的特性に関するもので、当時の免疫学の水準ではきわめて優れた内容であり、それは現在本学医学部資料室に残されています。実は私自身、本学医学部を卒業後大学院へは進学せず、すぐにアメリカの大学に留学し、どういうわけかポスドクとして雇用されて研究生活に入りました。私の最初の論文は1979年に、ロックフェラー研究所の発行するジャーナルに発表されましたが、同じジャーナルの1905年4月号に、後に京都帝国大学が認めた学位の根拠となった蛇毒についての Hideyo Noguchi 論文が載っていることを発見したときは驚きました。これは野口が29歳の時の論文ですが、私の最初の論文もほぼ同い年の刊行であり、因縁のようなものを感じたのをよく憶えています。

さて、我が国で、アメリカ型の「学位を与える教育課程」としての大学院が正式に制度化されたのは、戦後の学校教育法の制定によるものであり、1953年に国立大学に新制大学院が設置されました。学位は大学院での特定の学術領域での業績および学識に基づく審査を受

け、文部大臣の承認を必要とせず、大学がこれを自らの責任において授与するという制度になったわけです。従ってこの度のみなさんの学位は、京都大学学位であり、それに専門の学術領域を括弧書きで付記する形で表記されます。これはアメリカでも同様です。かねて、我が国における大学院生や学位取得者は、欧米諸国に比べ必ずしも十分な社会的な評価や待遇を受けていないのではないかという懸念があり、とくに大学院生に対する奨学金制度の劣悪さ、学位取得者の官界や民間企業などへの進出の遅れなどが指摘されてきました。最近ようやく政府・文科省も大学院生支援や学位取得者の社会進出についての様々な対策に乗り出してきたところです。我が国における学位はグローバル・スタンダードを完全に満たし世界的な通用性を保証されたものであり、学位取得者がアカデミアのみならず官界や国内外の企業など広く社会へ進出し活躍されることこそが、我が国の発展と世界平和の重要な鍵であることは疑いを入れません。

かつて哲学者のイマヌエル・カントは、「人は、哲学は学ぶことができない。哲学することしか学ぶことができないのだ」と『純粋理性批判』で述べています。「哲学する」こととは、「理性の才能を目前の試行（試みに行うこと）に即して修練する」ことであると言っています。私は哲学者ではありませんからこの真意はよくわかりませんが、しかし、この「哲学」を「科学」に置き換えてみると、よく理解できるような気がします。万古不変の普遍的な科学などというものが存在するのか、そしてそれを学び体得することなどできるのかどうかはわかりません。それでも、少なくともみなさんは、「科学する」ことによって「理性の才能を目前の試行に即して修練する」ことを実践的に学んでこられたわけです。「理性の試行」の対象は時と共に変化しうるものであり、わたしたちが直面しつつある課題も刻々と変化し一層複雑化してきています。かつてアメリカの大学院制度を創生したジョンズ・ホプキンス大学のギルマン学長の伝記には、博士とは「変幻自在な学位」（the protean PhD）であると書かれているそうです。世界は大きく変化してきており、こういう大きな変化の時代こそ、「知識としての科学」というよりは「科学する」ことを学んでこられた、つまり理性の修練を重ねてこられたみなさんのように優秀な人材が、様々な領域で変幻自在に活躍されることが望まれていると思います。

これからみなさんは中核的人材として、社会の様々な任地へ向けて旅立ちをされます。繰り返しますが、学位の授与は、到達点ではなく新しい出発点です。新しい世界で、これまで培われた修練の力を遺憾なく発揮して、人類とその社会のために貢献していただくことを心から期待し、応援して、お祝いの言葉に代えたいと思います。

本日はまことにおめでとうございました。

卒業式〔2020年度〕

2021（令和3）年3月24日

京都大学の様々な学部での学士課程を修了し、今日晴れて卒業式を迎えられる 2,770 名のみなさん、まことにおめでとうございます。御来賓の山極前総長、御列席の理事、関係部局長をはじめとする京都大学の教職員一同および在校生を代表して、心からお祝い申し上げます。また、今日の卒業の日まで、みなさんを支え励ましてこられたご家族やご親族の方々もさぞやお喜びのことと思います。卒業生のみなさんに代わり心から感謝しお祝いを申し上げたいと思います。1900年に第1回の卒業式を迎えて以来、121年にわたる京都大学の卒業生の数はみなさんを含めて217,226名になりました。

みなさんは学生生活の最後の年を、新型コロナウイルス感染症のパンデミックという未曾有の厄災のなかで、厳しい制約を受けながら過ごされました。昨年まで全く予期していなかった経験をされたことでしょうか。むろん、みなさんだけではなく、アメリカやヨーロッパを始め世界中の学生が同様の苦しい経験を味わってきたわけです。キャンパスに自由に入ることままたまならず、講義や演習は大半がオンライン授業となり、クラブやサークルの活動はもとより友人達との日常的な楽しい語り合いも対面では自由にできない、まことにつらい日々であったと思います。特に一人で下宿生活をしてきたみなさんは、大変不安な思いをされたことでしょうか。大学としてもこの想定外の事態の中で、みなさんの支援のために様々な対応をしてきました。また、時にはかなり厳しい御願いをしなければならなかったこともありますが、みなさんは本当によくがんばっていただいたと思います。ここにあらためて感謝します。

他方で、この異常事態の中で、みなさん自身がそれぞれの学問領域に関連して、いろいろ考えることも多かったのではないかと思います。みなさんは、自然科学や人文社会科学の様々な分野で科学の基礎知識を身につけてこられました。しかし、今回のパンデミックは、この世界には既存の科学や技術だけでは容易に解決に至らない大きな問題があるということ、如実に体感されたのではないのでしょうか。これはパンデミックに限らず、現代社会が直面する地球規模での人類の諸課題、例えば地球の気候変動、環境破壊や大規模自然災害などについても同様であると思います。私たちは長らく、科学や技術の進歩こそが、人類や社会の発展をもたらす原動力であると信じてきました。もちろんそうした近代化論自体は間違っていないのかもしれませんが。しかし同時に、人類全体に大きな影響を与える地球規模での複雑な諸問題は、必ずしも科学や技術の発展だけで自動的に解決に至るというものではないということも、いっそう明らかになってきたのではないのでしょうか。このような状況では、一人一人の人間が、現実をどのように認識し、どのように判断し、そしてどのように行動するかが、極めて重要な意味を持つこととなります。その意味では、戦前に西田幾多郎先生を中心とした京都学派が唱えた「自分で考える（selbstdenken／ゼルプストデンケン）」という

哲学をもう一度見直す機会なのかもしれません。それは京都大学に息づく批判的精神の伝統にも連なります。

情報化時代と言われて久しく、私たちの周りにはインターネットをはじめとする多様なメディアを介して日々膨大な情報が飛び交い、今や情報過剰の時代とさえ言えるかもしれません。情報の交信も SNS によってグローバルに、そして瞬時に可能になっています。ともすると私たちは、私たちを取り巻くこの膨大な量の情報に振り回され翻弄されて、自らの姿を見失いかねません。ここで私はみなさんに、「自分で考える (selbstdenken/ゼルプストデンケン)」の前提となる、批判的思考あるいは批判的精神ということについて少しお話したいと思います。ここでいう「批判的」とは英語の critical の訳です。手元の英語辞典によれば、それは difficult to deal with because a small mistake could make very bad things happen、つまり「小さなミスで重大な事態を引き起こしかねないため取り扱いが難しい」という語義です。漢字でも批判の「批」は「事実を付き合わせること」、「判」は「見わけ定めること」を意味しています。つまり、物事を与えられたまま鵜呑みにするのではなく、事実を見極め、自らの思考プロセスを検証することによって、判断し意思決定することの重要性を示しています。だとすれば、「批判」は俗に用いられるように、他者を非難する、攻撃する、あるいは論破するという否定的な意味では本来はありません。意思決定において、分析に必要なデータが十分にそろっているか、思考や判断の前提は正しいか、そのプロセスは論理的であるか、好き嫌いなどの恣意的感情や因習などのバイアスが入っていないか、などを自ら慎重に検証するということです。特に重要なのは、反射的、硬直的、独断的に判断しないことでしょう。ドイツの哲学者ハンス・ゲオルグ・ガダマーは、議論にあたりこのような十分な思索の上で結論に至った上でもなお、「しかし、相手が正しい可能性はある」と言っています。私は現代のような情報過剰の時代にこそ、このような冷静な批判的思考と精神の寛容さをもって「自分で考える」ことが重要になってくると思います。

みなさんは、ほぼ丸一年間にわたってオンライン授業というものを経験された、おそらく初めての学生であると言えるでしょう。これは大半の教員にとっても同様で、いわば手探りの状態から始めざるをえませんでした。コンピュータやソフトウェアの進歩により、少なくとも情報、さらには知識の伝達という意味でも、オンライン授業はそれなりに機能しましたし、場合によっては対面授業よりはもっと効果的ということもあったかもしれません。他方で、それまでは全く当たり前のことであり、気にもしていなかった人と人との直接的コミュニケーションの中に、実は非常に大事なことがあったのだという気づきもあります。それが失われてみて初めて重要性に気づかされたものとして、身体的に空間と時間を共有することによる共感、あるいはエンパシー、つまり他者への思いやりもあるのではないのでしょうか。高感度のマイクとカメラを用いた聴覚と視覚のみによるコミュニケーションは、情報伝達やデータ交換においては極めて効率的でありえます。しかし私たちは通常、空間と時間を触覚的に共有することによって、五感といわれる全ての感覚を用いて無意識のうちにその場

のあらゆる情報を感知し、それらを総合して対話的コミュニケーションを行なっています。これが、「場の空気や機微を感じ取る」あるいは「相手の心情を慮る」といったエンパシーを生み出すのではないのでしょうか。きっと、みなさんは今回の経験を無駄にせず、これまで十分に意識していなかったコミュニケーションにおけるエンパシーの重要性に改めて思いをいたすことでしょう。これを契機として、人と人との細やかで豊かな関係性を、これまで以上に大切にしていられることを願っています。

さて今日、京都大学の学士課程を修了されたみなさんは、これからさらに高度な研究の世界へ、あるいはいよいよ実社会へと、新たな旅立ちをされます。100年以上前にカナダのモンゴメリー夫人が書いた『赤毛のアン』という小説のシリーズがあります。これは世界でもっともよく読まれた児童文学だと言われており、みなさんの中には昔読んだ人もおられるかもしれませんが、私は子供よりむしろ現代の大人たちこそが読むべき本だと思っています。とくにみなさんには、ぜひ原著を英語で読むことをお勧めします。最も有名なのは、主人公アン・シャーリーの子供時代を描いた部分ですが、アンがちょうど今みなさんと同様に学校を卒業して小学校の先生になった時代の第38章 "The Bend in the Road" (道の曲がり角)の中にこんなくだりがあります。"I love bended roads. You never know what may be around next bend in the roads." 私は曲がり角のある道が大好きだ。次の角を曲がったら、どんな景色なのか、一体どんな人と出会うのか、どんな思いがけない出来事が待っているか、わくわくする、といったところでしょう。この長編小説の底流に一貫しているのは、人生と自然への尽きない好奇心と底抜けに明るい楽観主義です。その意味でも、主人公の自己形成の過程を描く教養小説、文字通りの Bildungsroman／ビルドゥングスロマンの傑作だと私は思います。

みなさんは、様々な分野で科学の基礎的知識と素養を身につけられてきましたが、これからはそれを基礎として、いよいよ次のステップに進まれることとなります。それが、さらなる研究の道であれ、新しい実社会での生活であれ、みなさんに、健全な批判的精神、他者への繊細な共感であるエンパシー、そしてアン・シャーリーのような底抜けに明るい楽観主義を備えた、健全な市民（シチズン）として、力強く羽ばたいていただくことを心から期待をしています。最後に、みなさんにはできるだけ若い時代に、海外での生活を経験されることを強くお勧めしておきたいと思います。私自身、20代の後半をアメリカの研究室で過ごし、世界中のいろいろな国から集まった同世代の若者達と切磋琢磨する日々を送ってきました。この経験がそれから40年を過ぎた現在にいたるまで、私の人生の歩みや思考様式に大きな影響を与えたと思っています。みなさんには、是非とも教養ある新しい地球市民として、自らの世界を切り開いて行かれることを心から祈念して、総長からの祝辞に代えたいと思います。

みなさん、本日は本当におめでとうございました。

("は、L. M. Montgomery, *Anne of Green Gables* より引用)

学部・大学院入学式〔2020年度〕

2021（令和3）年4月7日

昨年は新型コロナウイルス感染症拡大のため、まことに残念ながら、みなさんの入学式を執り行うことができませんでした。あれからちょうど1年、遅ればせながら今日ここに、みなさんと直接対面し、なんとか入学式を行うことができることを、ご来賓の山極壽一 前総長、ご列席の理事、関係部局長をはじめとする京都大学の教職員とともに、心から喜ばしく思っております。あらためまして、みなさん、京都大学へのご入学あるいは大学院へのご進学まことにおめでとうございます。感染症はまだ完全な終息には至っておらず、みなさんのご家族の方々をこの場にお迎えすることはまだかないませんが、ようやく直接みなさんに語りかけることができ、本当にうれしく思っています。

昨年来、新型コロナウイルス感染症のパンデミックのため、人々の社会活動が大きく制約されるという異常な事態が続きました。みなさんも、入学以来キャンパスの中へ自由に足を踏み入れることもままならず、ほとんどすべての授業もオンラインという形式で受けざるを得ないという状態を強いられてきました。特に学部新入生のみなさんは、楽しみにされていた新しい友人との出会いや、クラブやサークルなどの課外活動もできない状態が続き、さぞかし不安で心細い日々であったと思います。また、みなさんを支えはげましてこられたご家族のご心配も、いかほどであったかと思えます。この厳しい環境の中で、それでも気力を保ち、今日までがんばってこられたことに対して、心から敬意を表します。

アメリカのジョンズ・ホプキンス大学の報告によれば、3月の時点ですでに世界で約1億3000万人もの方が新型コロナウイルスに感染し、その犠牲者は270万人を超えています。今回のような、人類が初めて出会う病原体による感染症は、新興感染症とよばれます。比較的最近に限っても、後天性免疫不全症候群（エイズ）、エボラ出血熱、重症急性呼吸器症候群（SARS）、中東呼吸器症候群（MERS）など、人類はこれまで何回も新興感染症に見舞われてきました。一体これらの病原体はどこからやってきたのでしょうか。結論から言うと、野生動物です。様々な野生動物の中で共存していた病原体が、何らかの契機で人に感染し、やがて人から人へと感染するように適応変化してきたものです。実際、今では人類に特徴的と考えられている多くの感染症、たとえば、麻疹（はしか）、結核、天然痘、インフルエンザ、百日咳なども、過去数千年から1万年ほど前の間に、牛、豚、鳥などの動物から人に感染し、やがて人から人へのみ感染するようになったものと考えられています。これは旧大陸で人類が、人口密度の高い農耕定住生活を始め、牛や豚などの野生動物を家畜化していった時期に相当しています。カリフォルニア大学ロサンゼルス校のジャレド・ダイヤモンド教授はその有名な『銃・病原菌・鉄』（Guns, Germs, and Steel）という本の中で、これら人類の感染症は、家畜化された動物からの「恐ろしい贈り物である」と言っています。その後数千年の間に、旧大陸の人類はこれらの病原体に対して一定の抵抗力を獲得しますが、現在でもまだ天然痘を除くほとんどの病原体は、完全には駆逐されていません。

旧大陸の人類は、1 万年以上前から新大陸へも移動し、そこで定着していきました。しかし大航海時代に、軍馬と鉄製の銃を持った少数のヨーロッパ人の侵略により、新大陸のアステカ帝国やインカ帝国が 16 世紀に滅亡に至ったことはよく知られています。ジャレド・ダイアモンドによれば、実際は帝国滅亡よりかなり以前に、新大陸原住民の人口はすでに大きく減少しており、その主たる理由は、旧大陸人が持ち込んだ感染症でした。例えば、今のメキシコ地方に 2 千万人もいた新大陸人の人口は、旧大陸人が持ち込んだ天然痘の大流行によって 160 万人にまで激減したと推定されています。当時の新大陸原住民はまだ密集した農耕定住生活をせず家畜も持っていなかったため、初めて遭遇した動物由来の感染症には全く抵抗性がなかったためと思われます。病原体が、地球レベルで人類史を大きく変化させたと言っても過言ではないでしょう。今回の新型コロナウイルスも、コウモリなどの野生動物由来と推定されていますが、まだ確定はされていません。しかしながら、かつての天然痘などとの大きな違いは、近年のグローバル化のなかで数百年単位ではなく、数ヶ月単位で地球上の全ての人類に広がったということでしょう。今、ポストコロナ時代の社会の有り様についての議論が盛んですが、はるか数万年の期間に及ぶ現生人類と感染症との長い戦いと共存の歴史に思いをはせてみるのも、意味のないことではないかもしれません。

さて、京都大学は 1897 年に創立され 120 年以上という長い歴史を持つ大学ですが、入学式が中止されるという経験をされたのは、実は皆さんが初めてではありません。戦前の帝国大学時代はさておき、少なくとも戦後の新制大学になってから一度、入学式が実質的に中止されたことがありました。もう半世紀前になりますけれども 1969 年のことです。当時は世界中でスチューデント・パワーが歴史の表舞台に出た激動の時代であり、パリやベルリンなどヨーロッパ各地でも大学生を中心とした大規模なデモがあり、我が国でも多くの大学でいわゆる学生運動が起こっていました。京都大学も例外ではなく、1969 年には大学全体がバリケード封鎖され、その年の入学式は、一部学生の乱入によりわずか十秒で閉式となりました。実は、私が京都大学に入学したのはまさにその年であり、みなさんと同じ経験をしました。入学後も丸 1 年間近く大学には入れず、当時は今のようにオンラインシステムというものはもちろんまだなかったので、そもそも授業そのものが全くありませんでした。私は地方から京都へ出てきて初めて一人で下宿生活をするようになったので、この 1 年のみなさんの不安やいらだちなどの気持ちはよくわかります。結局、私は入学式を体験しないままでしたけれども、今日半世紀ぶりに同じような経験をされたみなさんにお話しできるのも、感慨深い思いでいっぱいです。そこで今日は、当時のことを思い出しながら、私からみなさんに、二つのことをお勧めしたいと思っています。

ひとつは、じっくりと本を読み込むことです。最近は情報化時代と言われ、インターネットには膨大な量の情報があふれています。時空を超えて、情報を手に入れるには非常に便利です。今日ではパソコンやタブレットで文字情報に触れるほうが多いかもしれません。しかし、

読書とは単に情報にアクセスするためだけの手段ではありません。中村文則という若い芥川賞作家がいますが、彼は、「本を読む姿は格好が良い」と言っています。これは恐らく、本を読む人とその本を書いた人との間に感情的な交流が起こり、それが読む人の姿からにじみ出てくるということでしょう。その中村文則さんは、アパートで一人鬱々としていた大学1年生の時に、初めてドストエフスキーの『地下生活者の手記』を読み、自分の人生のおおまかな方向が決まったような気がすると書いています。彼の小説に出会わなかったら、鬱々としていた僕は生きていなかったかもしれないし、作家になっていなかったかもしれない。実は私も大学3年生のころに、フランク・マクファーレン・バーネット卿の書かれた“Cellular Immunology”、細胞性免疫というタイトルの本に出会いました。バーネット卿は、現代免疫学の理論を確立した先駆的免疫学者で、1960年にノーベル生理学・医学賞を受賞されています。英語の勉強のつもりでこつこつと読んでいました。全13章からなる大著でしたが、ガンと免疫について考察した最終章だけはどういうわけか非常に短く、「自分はガン免疫というものを信じているが残念ながら今わかっていることは殆どない」という結論でした。その後も、この第13章の文章がずっと心に残っていましたが、卒業後間もなく留学の機会を得て、アメリカの研究室でガンと免疫についての研究を始めることになりました。

この20歳代後半の丸3年におよぶアメリカ生活の経験が、その後の人生の道筋に決定的な役割を果たしたと思っています。学生時代のバーネット卿の本との出会いと、それに触発されての渡米ということがなければ、自分の人生はずいぶんちがったものになっていたろうと思っています。そこで私のもうひとつの勧めは、できるだけ若い時期に海外へ出かけてみるということです。私が随分親しくさせていただいている建築家の安藤忠雄さんも、よく同じようなことを言われています。建築には縁もゆかりもない学生時代を過ごした安藤さんが、完全な独学で建築家への道を志した20代前半にやったことは、3ヶ月かけて文字通り地を這うようにヨーロッパ中を巡り歩くことでした。貧乏生活の中で、毎日各都市のあらゆる遺跡や建築群に自分の手で直に触れて肌で感じていたと彼は言っています。この経験が、やがて世界を感嘆させる独創的な安藤建築ワールドの展開に繋がっていることは、疑う余地がありません。当時の安藤さんの読書量もすさまじいものだったようで、建築史家の三宅理一（みやけりいち）さんが執筆された『安藤忠雄—建築を生きる』という評伝には、「少年時代の勉強嫌いがどこで転じたのか、20代の安藤はガリ勉そのものであったといってもよい」と書かれています。みなさんの中には、海外旅行の経験のある人もいますが、大事なことは、たとえ短期間でも全く新しい環境の中で実際に生活してみることです。思いもかけなかったような新しく力強い自分を発見することになるかもしれません。

これからみなさんが、自由な心で自らの道を切り開いて行かれる後には、間違いなく、みなさん一人一人の歩いた道ができていくはずです。そのために京都大学は、できる限りの支援をさせていただきたいと思っています。この1年みなさんは大変な経験をしてこられました

たが、この経験を将来への糧として、これからの大学生活や研究生生活を送っていただきたいと願っています。

本日は、あらためてまことにおめでとうございます。

[注]2020年度学部及び大学院入学式は新型コロナウイルスの感染拡大を受けて中止され、2021年4月7日に改めて執り行われた。

学部入学式〔2021年度〕

2021（令和3）年4月7日

本日、京都大学に入学された2,942名のみなさん、入学まことにおめでとうございます。ご来賓の井村 裕夫 元総長、松本 紘 元総長、山極 壽一 前総長、ご列席の理事、関係部局長をはじめとする京都大学の教職員とともに、みなさんの入学を心よりお祝い申し上げます。同時に、これまでのみなさんのご努力に敬意を表しますとともに、みなさんを支えてこられましたご家族や関係者のみなさまにお祝い申し上げます。

昨年来、世界中が新型コロナウイルス感染症のパンデミックの惨禍に見舞われ、我が国でも多くの社会活動が制約されるという異常な事態が続きました。そのような困難な状況のなかでも、みなさんは必死にがんばって勉学に励み、今日晴れて入学式を迎えることになったわけであり、その喜びもひとしおだと思います。これにはもちろんみなさん自身のがんばりもあったと思いますが、みなさんの周りのご家族や先生方の強い支えや励ましの力も大きかったはずです。是非そのことも心に刻んでおいてください。去年は、コロナ禍の最中で残念ながら入学式を断念せざるをえませんでした。今年は何とか入学式を執り行うことができ、みなさんに直接対面してお話しができることを、本当に喜ばしく思っています。

さて、これからみなさんは、京都大学の学生となります。本学を志望するにあたって、これまでみなさんは周りの人たち、高校の先生や先輩、あるいはホームページなどからの情報で、京都大学について様々なイメージをもってこられたでしょう。120年以上の歴史を持つ伝統ある大学、アジアで最も多くのノーベル賞やフィールズ賞受賞者を輩出している研究力を誇る大学、探検や冒険やフィールド活動が盛んな「おもしろい大学」、反骨精神の強い野生的な大学、いろいろあるかもしれません。しかし多分、もっともよく耳にされたのは、「自由の学風」という言葉ではないでしょうか。確かに自由の学風は、様々な京都大学のイメージの基礎にある伝統かもしれません。では、ここでいう自由とは一体何でしょうか。

16世紀のフランスに、エティエンヌ・ド・ラ・ボエシという早熟の思想家がいました。親友のモンテーニュによれば、ボエシが古典的名著である『自発的隷従論』を書いたのは16歳から18歳、今のみなさんとほぼ同年代の頃と言われています。その中で自由についての考察で、こんな喩えを書いています。「自由とは、生き物の自然の本性であり、野生の馬は調教しようとする、轡（くつわ）に噛みつき抗うものだ。しかし轡を強制され続けると、やがて馬は進んで轡をはめそれを楽しむようになる」と。つまり、自由は人の自然の本性であるが、しばしば周りの環境や慣習によって人は容易にそれを放棄してしまう、というわけです。私は、自由とは本来の自分というものを、周りの環境や慣習など様々な外的束縛から解放し発見することだと解釈しています。みなさんはこれまで、大学入学を大きな目標として頑張ってきた、それはみなさんの人生の重要なプロセスであったと思います。しかし、

大学入学を機会に、自らの自由な精神を、みなさんを取り巻いてきた常識や慣例から一度解放してみてもいいのではないのでしょうか。そうしたらみなさんは、これまで自分でも気がつかなかったような思いがけない自分を発見することになるかもしれません。そのためには引き金が必要ですが、今日私からみなさんに、二つのことをお勧めしたいと思っています。

ひとつは、じっくりと本を読み込むことです。最近は情報化時代と言われ、インターネットには膨大な量の情報があふれています。時空を超えて、情報を手に入れるには非常に便利です。今日ではパソコンやタブレットで文字情報に触れるほうが多いかもしれません。しかし、読書とは単に情報にアクセスするための手段ではありません。中村文則という若い芥川賞作家が、「本を読む姿は格好が良い」と言っています。これは恐らく、本を読む人とその本を書いた人との間に感情的な交流が起こって、それが読む人の姿からにじみ出てくるということを行っているのだらうと私は解釈しています。エンパシー、つまり共感の姿と言って良いかもしれません。これは小説や文学に限らず、科学論文の際にも大いにありうるということを、いずれみなさんも経験することになるでしょう。さて、その中村文則さんは、アパートで一人鬱々としていた大学1年生の時に、初めてドストエフスキーの『地下生活者の手記』という本を読んだそうで、恐らくあの時、僕の人生のおおまかな方向は決まってしまったのだと思う、と書いています。実は私も大学3年生のころに、フランク・マクファーレン・バーネット卿の書かれた“Cellular Immunology”、日本語では細胞性免疫というタイトルの本に出会いました。バーネット卿は、現代免疫学の理論を確立した先駆的免疫学者で、1960年にノーベル生理学・医学賞を受賞されています。英語の勉強も兼ねてこつこつと読み進めていきました。この本は、全13章からなる大著でかなり時間がかかりましたが、ついに最終章つまり第13章にたどり着くと、この章だけが異常に短いことに気がつきました。この章は、ガンと免疫についての考察でした。自分はガン免疫というものを信じているが、残念ながら今わかっていることはまだほとんど無く、書けることもあまりない、というのがその章の結論でした。その後もこの第13章の文章がずっと頭に残っており、結局は「ガンと免疫」というテーマが私の研究のライフワークになりました。

もうひとつお勧めしておきたいことは、なるべく早い時期に海外へ出てみることです。今やグローバル社会になり、みなさんの中には海外旅行の経験のある人もいるとは思いますが、たとえ短期間でも海外で実際に生活することは、これまでの常識や慣例から解放された自由の中で、自分を発見する大きなきっかけになるかもしれません。私自身、先ほどお話ししたバーネット卿の本との出会いの後、機会を得て卒業後間をおかずに渡米し、ニューヨークの研究室でガンと免疫についての研究を始めることになりました。20代後半の丸3年間、アメリカはもちろん世界各国から集まったほぼ同世代の若い研究者や大学院生たちと切磋琢磨する研究生活を送りました。これが私のその後の人生の道筋に決定的な役割を果たしたと思っています。異なる国の同じような興味と志をもつ若者たちが、どれほど自分と同じであり、また、どれほど自分と違っているかということを日々感じたものです。当時の仲間

とは、40年以上経った今でも交流が続いています。大学時代にバーネット卿の著書に出会い、それに触発された20代半ばでの渡米という二つのことがなければ、自分の人生は随分ちがうものになっていただろうと思います。みなさんにも、新しい大学生活の中で、人生にとっての大きな出会いがあることを希望しています。

京都大学からはこれまで、1949年の我が国初となる湯川秀樹先生のノーベル物理学賞に始まり、計11名のノーベル賞受賞者が出ています。これはアジアの大学の中では最も多い数です。もちろんノーベル賞というのは、けっして研究の目的ではありません。それは学問の領域を問わず、これらの先輩たちが時代の流行や慣習にとわられることなく、純粋に自由な発想から未開の領域を切り開いてこられた結果といえるでしょう。この自由な学風の下に、新しい学問の世界が開拓され、結果として人々の生活や福祉や健康にも資する成果が生みだされてきたわけです。これが京都大学の学問の伝統です。直近では、2018年に本庶佑先生がノーベル生理学・医学賞を受賞され、私も共同研究者としてストックホルムでの授賞式に参列してまいりました。その本庶先生は、こうっておられます。「京都大学で私たちはいつもナンバーワンよりはオンリーワンを目指してきた。しかし真の理想は、オンリーワンとして自らが掘り当てた小さな泉の水が、やがて小川から大河となり、ついには滔々とした時代の流れを形成することだろう」と。みなさんも、今日からこの京都大学の一員です。是非みなさんにも、これまでの思考の習慣や社会の流行などから一度離れて、本当に自分の心が動かされる泉をその手で探し求めていただきたいと願っています。それは、すぐには見つからないかもしれませんが、多くの試行錯誤が必要でしょう。しかし、そのような気持ちを持ち続けることが自由であるということであり、それが京都大学の「自由の学風」というものであろうと私は思っております。

詩人高村光太郎の『道程』という約100年前、大正3年に書かれた詩は、「僕の前に道はない。僕の後ろに道は出来る」という有名なフレーズで始まります。これからみなさんが自由な心で自ら切り開いて進んでいかれる後には、みなさん一人一人の歩いた道が必ずできるはずです。そのために京都大学は、できる限りの支援をさせていただきたいと考えています。

本日は、まことにおめでとうございます。

大学院入学式〔2021年度〕

2021（令和3）年4月7日

本日、京都大学大学院に入学した修士課程 2,274 名、専門職学位課程 333 名、博士（後期）課程 905 名のみなさん、入学おめでとうございます。ご来賓の松本紘 元総長、山極壽一 前総長、ご列席の理事、関係部局長をはじめとする京都大学の教職員一同を代表して、みなさんの入学を心からお慶び申し上げます。また、これまでみなさんを支えてこられたご家族や関係者のみなさまに心よりお祝い申し上げます。

今日からみなさんは、様々な学術領域で京都大学の大学院修士課程、専門職学位課程、あるいは博士（後期）課程における新しい研究生活への第一歩を踏み出されます。昨年度は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックで世界中が翻弄されました。現在も予断を許さない状況が続いております。我が国も例外ではなく、みなさんも非常に制約の多い困難な生活を余儀なくされてきたことと思います。そのような中でも無事、学士課程を修了され、あるいは社会人としての生活に区切りをつけられ、新たに本学の大学院に入学をされたことに敬意を表し、心から歓迎したいと思います。

さて、みなさんがこれから入学される大学院というのはどういうところでしょうか。文部科学省では、「我が国の大学院は、一定の教育目標、修業年限および教育課程を有し、学生に対する体系的な教育を提供する場、つまり教育の過程として位置づけられ、そのような教育を修了した者に特定の学位を与えることを基本とする課程制度」とされています。つまり一言で言えば、「学位を与える教育課程」であるということです。このような「学位を与える教育課程」としての大学院を初めて創出したのは、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学にあります。日本大学の羽田積男（はだせきお）先生が、アメリカの医学教育に革命をもたらしたエイブラハム・フレックスナーの『大学論』などをもとに詳しく紹介されています。19世紀半ばに、アメリカで最初に博士学位を出したのはイェール大学であることはよく知られていますが、当時学位は非常に稀少で、全米でも年間たかだか 20 件程度であり極めて特別なものであったようです。しかし 19 世紀後半にジョンズ・ホプキンス大学では、当時一般教養、あるいはリベラル・アーツの教育機関であった大学を卒業した学生を対象として、高度な研究を可能にする課程組織として初めて大学院を作り、ここに学位取得プログラムをその重要な要件として組み込んだのです。

この背景には、18 世紀半ばから 19 世紀にかけてのヨーロッパでの産業革命に伴う科学技術の急速な発展により、まずドイツを中心に科学研究を大学の基本的な機能とするという機運が生まれたことがあります。それまで大学は教養を高め、神学・医学・法学など専門的な職業人養成のための機関であり、科学研究は主に資産と時間に余裕のある貴族階級のやることでした。その代表の一人は、近代の物理学と化学の基礎を築いた天才ヘンリー・キャ

ベンディッシュでしよう。彼は莫大な資産を有するデヴォンシャー公爵家の出身であり、ケンブリッジ大学に学んだ後、自らの別荘に実験室と工作室を作り、殆ど誰とも交わらずに様々な実験を行いました。彼は存命中には王立協会に18編の論文を発表したに過ぎません。しかし、彼の死後残された膨大な実験ノートについてジェームス・マクスウェルによって詳細な検証と再現実験が行われ、近代の物理や化学の基礎をなす重要な原理の多くが、極めて正確な実験によってすでに証明されていたことが明らかにされました。1871年にケンブリッジ大学に彼を記念しマクスウェルを所長として設立されたキャベンディッシュ研究所からは、現在まで単一研究所としては世界最多の29人のノーベル賞受賞者が輩出されています。

さて、1810年のベルリン大学創設とともに、研究と教育を一体化させるいわゆる「フンボルト理念」、研究主義がドイツの大学で広まります。その影響を受けて、アメリカで初めて創設されたジョンズ・ホプキンス大学の大学院はその後、多くの優秀な学位取得者を生み、彼らは大学など研究機関や政府・民間の組織で要職についていくことになりました。この大学院の成功に触発され、19世紀末までには、ハーバード大学、コロンビア大学、シカゴ大学など全米の主要大学に相次いで大学院が設立され、20世紀に入ると全米でまとまった数の学位取得者が毎年輩出されるようになりました。当時の修士と博士の学位は現在のような上下関係ではなくて、むしろ並列的であり、それは主に各大学の慣行によっていたようです。やがて彼らが世界の学術研究や科学技術の発展において中心的な役割を果たすようになりました。こうして、19世紀にはドイツの大学が、そして20世紀に入るとアメリカの大学院が、世界をリードしていくこととなります。

本学が我が国で2番目の帝国大学として創立されたのは19世紀末の1897年であり、先行する東京帝国大学が座学を中心として高度専門人材養成に主眼を置いたのに対し、本学は研究を中心的な機能と考えるドイツ型の研究大学を志向していたことはよく知られているとおりです。当時もちろん学位制度はありましたが、これは学位令により帝国大学や博士会の推薦によって、大学ではなく文部大臣が授与するものであり、やはりこれも希少で称号的色彩の強いものでした。大学に「学位を与える教育課程」としてのアメリカ型の大学院が設置されたのは、戦後新制大学になってからであり、文部省令として国立大学に大学院設置基準が定められたのは1974年のことです。その後、我が国でも、毎年恒常的に修士や博士の学位取得者が生まれるようになり、今日まで京都大学からは延べ90,543人の修士、46,427人の博士が生まれ、その多くの方々は、社会の様々な分野で目覚ましい活躍をされています。

さて、これからみなさんは、この京都大学の様々な学術分野の大学院に入学され、本格的な学術研究活動を始められることになります。20世紀以降、科学や技術はその厳密な因果律を基礎に飛躍的な進歩を遂げ、人類と社会の発展に主導的な貢献をしてきましたが、学術や科学をとりまく状況は大きく変わりつつあります。例えばこの度の新型コロナウイルス感

感染症のパンデミックをとってみても、確かに医学や生物学の進歩は、かつては考えられなかったほどのテンポで原因ウイルスの同定、感染メカニズムの解明や診断法の確立、さらにはワクチンの作成までもたらしましたが、まだこの感染症の克服には至らず、世界での感染者は、ジョンズ・ホプキンス大学の3月の調査によれば、約1億3000万人となり、実に270万人以上の犠牲者が出ています。

パンデミックに対応する各国の意志決定には、その地域の歴史や生活様式、文化、宗教、政治・経済体制など多くの要素が複雑に絡み合ってきます。そのため、最先端の科学技術を駆使しても、それだけでは明確な指針を打ち出すことはできません。今人類が直面している最大の課題の1つとされる地球の気候変動についても同様です。最新の科学によって地球の平均気温の上昇による危機的な環境変化が予測され、その主因の1つと考えられている大気中の二酸化炭素濃度を抑えるために様々な新技術が開発されつつあります。しかし、人類と社会の健全な存続のために考慮すべき、いわゆる「地球の限界」Planetary boundaryについては、すべての人が納得ができる最適解を示し得ていません。これらの地球規模での事象は極めて複雑で不確実性が高く、しかもその意志決定に非常に多くの利害が関与しており、科学哲学者ジェローム・ラベッツらの言う「ポスト・ノーマル・サイエンス」の領域にあると考えていいでしょう。この領域では、これまでのような個別科学の進歩や革新のみでは明らかに限界があり、より包括的で新しい形の科学が必要とされていると考えられます。ラベッツは、それを「安全と健康と環境そして倫理の科学」The sciences of safety, health and environment, plus ethics と呼んでいます。

これからみなさんが、どのような学術研究分野へ進まれるにせよ、各領域での確実な知識と技量に加え、より広い観点や見識も要求されてくると思います。私事になりますが、私自身は大学院を経験していません。大学を卒業した後どうしてもやりたい研究があって、気がはやるあまりすぐにアメリカの大学の研究室に飛び込みました。幸いそのメンターは私のやりたい研究を全く自由にやらせてくれ、以来40年にわたり研究生活を続けてきましたが、今振り返ってみると、大学院をショートカットした代償として、科学全般にわたる広い基本的な知識やリテラシーを身につけるのにその後ずいぶん苦労したと思っています。先ほど述べたように、世界の複雑性が亢進する中で学術・科学のあり方も大きく変わりつつあり、将来の研究者にとって大学院教育の重要性はかつてないほど大きくなっています。

とはいえ、学術研究とは元来、個人の好奇心や未知への探究心を動機としたものです。それは時代が変わっても変わるものではなく、当事者にとっては楽しくチャレンジングなものです。研究者の好奇心とチャレンジ精神こそが、学術と科学研究の原動力です。みなさんも、これから始まる新しい研究生活にわくわくされていることと思います。私自身40年以上も学術研究の世界で過ごしてきましたが、いろいろ苦しみや悩みもありました。しかし、結局はそれさえも楽しんできたとすることができるかもしれません。みなさんも、これからこの

京都大学の大学院課程で、思う存分研究生活を楽しんでいただくことを心から祈念して、私の挨拶にかえたいと思います。

本日は、まことにおめでとうございます。